

東京 2020 オリンピック・パラリンピック

「オリンピックは、勝つことではなく、参加することにこそ意義がある」（エセルバート・タルボットの言葉。近代オリンピックの父クーベルタン男爵がこれを引用して演説したため、クーベルタン男爵の言葉として有名になってしまった。）2021年の東京オリンピック・パラリンピックの開催の是非について、様々な意見があることは承知している。もし様々な条件が整って開催されたとしたら、白血病を克服した水泳の池江璃花子選手、体操のレジェンド内村航平選手、マレーシアでの大きな交通事故から復活したバドミントンの桃田賢斗選手、兵庫県出身の柔道の阿部一二三、詩兄妹など、多くのアスリートの活躍が期待される。前回の東京オリンピックが開催された1964年に生まれた私にとって、感慨深い。

クーベルタン男爵は前述の演説で「自己を知る、自己を律する、自己に打ち克つ、これこそがアスリートの義務であり、最も大切なことである。」と述べている。「アスリート」を「人間」に代えてみると、非常に大切なことが伝わってくる。失敗しないのが大切なのではなく、できるだけ多くの挑戦に取り組み、もし失敗しても、そこから生じる経験を糧にして、自分自身を成長させることが大切だと教えてくれる。

どうせ無理???

一方、あなたは挑戦する前に、その挑戦さえ諦めてしまっていないだろうか。挑戦しなければ失敗もしないから、傷つくことはないかもしれない。しかし、自分の今の力を知ることはできないから、今後の戦略は立てられない。挑戦することで、たとえ一歩でも夢に近づくことができるのに、その歩みすら放棄してしまっていないだろうか。水泳の池江璃花子選手の復活の過程が私たちに示唆してくれることは、決して小さくない。

「できない理由すら考えなくなる最悪の言葉が『どうせ無理』。この言葉が人間の脳波を止めてしまう。思考が止まると楽ですが、それだと何も始まらない。」（植松努：植松電機代表取締役）

あなたは、「どうせ無理」って言っていない？

何が起きるかわからない世の中だから、オリンピックでも例えば、自分より強い人が何らかの原因ですべて失格になってしまうことも考えられる。参加さえすれば、金メダルを取る可能性は0%ではなくなる。メダルを取ることがすべてではないが、「参加」を「挑戦」に置き換えてみよう。「参加することにこそ意義がある」というのは、もしかしたらこういうことにもつながるのかもしれない。

だから、「We keep on challenging.」なのだ。

6月10日の体育祭

6月10日の体育祭は、心を揺さぶられた。中学校までは、あまり目立たなかった生徒がほとんどだったのではないだろうか。そんな生徒の皆さんがオリンピック選手に負けないくらい輝いていた。

こんなに一所懸命走り、こんなに一所懸命応援し、こんなに一所懸命片づけをする姫路別所高校生の姿を想像していなかった。生徒たちを心から信じてやれていなかったことを今は深く反省している。

We keep on challenging. 挨拶日本一の高校を目指して 文責：姫路別所高等学校長 篠原 歩